L1J

本科１期４月度

解答

Ｚ会東大進学教室

# 高１東大国語

# 1章

## 【問題】（演習）

出典…加藤周一『文学の概念』／明治大学・政経学部

**文章略解**

科学的な経験は、具体的な経験の一面を抽象し、他の同類の経験と関係づけられ分類されたものだ。これは原則として一定の条件の下で繰り返されるが故に、法則の普遍性について語ることが出来る。一方文学的な経験は、分類不可能な一回限りのものである。両者はこのように、概念上はっきりと区別しうる。ところが、日常生活の経験は文学的な面を含むと同時に科学的な面をも含む。これを文学から区別することは困難であろう。

**解答**

問1　ア＝4　イ＝1　ウ＝5　エ＝3　オ＝2

問2　具体的で特殊な一回かぎりの経験〔16行目〕

問3　具体的経験をその一回限りの具体性において捉える点。〔25字・解答例〕

問4　(ウ)

問5　科学は具体的な経験の一面を抽象化し、他の同類の経験と関係づけて普遍的な法則を見出そうとするのに対し、文学は特殊な一

回かぎりの経験の具体性に価値を置くという違い。〔80字・解答例〕

## 【問題】（自習）

出典…田中美知太郎『読書と思索』／オリジナル問題

**文章略解**

人間教育における教養の意義について述べた文章。教養について、一般的に「人間を作るもの」と「無用で役に立たないもの」という対立した見解がある。筆者は、古代ギリシアの哲学者を証例として挙げ、「教養」と「教育」の関係について推論を進めながら、社会における教養の真の役割について考察している。役立つ人間をつくるという点では、教養は何の役割も持たない。社会が要請する現実の奴隷からわれわれを解放することが、教養の役割である。

## 解答

**問1**　①＝無抵抗　②＝能率　③＝肯定　④＝難局　⑤＝効用　⑥＝奴隷

**問2**　A＝(イ)　B＝(オ)　C＝(ア)　D＝(ウ)

**問3**　社会の要求が、全て社会のためになり社会にとり必要であるか、という疑問。〔35字・解答例〕
社会の欲するものが、社会のために果たしてなるものかどうかという疑問。〔34字・別解例〕

**問4**　(ア)＝A　(イ)＝A　(ウ)＝A　(エ)＝B　(オ)＝A　(カ)＝B　(キ)＝B

## 解説

**問2**　このように空欄が複数ある問題の場合は、明確な所から片づけることが短時間で解くコツだ。(イ)と(ウ)に関しては、共に逆接になっているので、これらの違いを押さえることが、一つのポイントになる。

空欄A・Bについては、前半部の文構造が把握できていれば比較的楽に解ける。ここは、『一般的な前提（社会の要求から考えると教養は無用）＋ A ＋前提に対する疑問（社会の必要がわれわれにとってすべてであるのか）＋ B ＋前提に対する反対の考え（社会の要求に合致するように作られた人間は多くの人々を不幸に陥れる方向に盲目的に努力する）』という文章の展開になっているが、実はこれと同じパターンの展開が、問題文の冒頭にあるのだ。『一般的な前提（教養は人間をつくる）＋しかしながら＋前提に対する疑問（教養は人間をどこまで作れるのか）＋むしろ＋前提に対する反対の考え（実生活が人間をつくる）』がそう。従って、空欄Aには(イ)の「しかしながら」が、Bには(オ)の「むしろ」が入ることがわかる。

空欄Cは、後が「……か。……か。」と疑問を表す文が続くので、疑問の強調を示す（呼応の）副詞の(ア)が選べる。

残りのDであるが、前の部分では教養の力強さ（・効果・目的）を述べているが、空欄の後ではこれを打ち消している。従って、逆接の接続語が入ることになる。(イ)と(ウ)が共に逆接であるが、(イ)は既に使われているので、ここには(ウ)が入る。

**問3**　傍線部(a)に含まれている指示語は「その」であるので、指示内容は傍線部よりも前にあると考えられる。そこで前へと文章を辿ると、「社会の欲するものが、社会のために果たしてなるものかどうか、多くの場合極めて疑問である。」という一文にあたる。基本的には、この部分が押さえられ三十五字以内でまとまっていれば、一応の及第点だ。文末はもちろん「……という疑問」という形にすること。だが余裕のある人は、もう少し考えてほしい。傍線部(a)の直後に「……多くの人々を不幸に陥れる方向に、盲目的な努力をすることになる」とあるが、これは空欄Bの直後の「過誤と失敗にみちていて、われわれは多くの場合不幸である」と同内容である。では、なぜ「過誤と失敗にみち」た状態になるのかを考えると、その前の「社会の必要が、われわれにとってのすべてであるかどうか」、つまり「本当にそれだけが必要なものなのか」という疑問にぶつかるはずだ。この点まで含めた、つまり「社会の要求が本当に必要であるのか」「社会の要求が全て社会のためになるのか」、という二点を含ませたものが解答例になっている。今の段階ではここまでの解答は要求していないが、このように文章を解釈するクセを、今のうちからつけておきたい。

**問4**

(ア)は「ソクラテスの……むしろ有害であると信じた」(2～4行目)の部分に合致しているのでA。

(イ)は「現実をよく見ると……教養はこのような間接的な効用をもつと言うことができるであろう。」(19～23行目)と、「それはこれまでに……解放してくれることになるのではないだろうか。」(29～32行目)の部分に合致しているのでA。

(ウ)は「社会化の作用は、……言うことができるであろう。」(4～5行目)の部分に合致するので、これもA。

(エ)について。(エ)の選択肢の「教養は、恐るべきものを……勇気を養う」の部分は、本文中の「恐るべきことは……教えている。」(25～26行目)の部分に合致しているが、これについてその後で「このような効果を、教養は直接の目的とするものではない」(28～29行目)と述べているので、「第一の目的とする」という選択肢とは合致しない。従って、B。

(オ)は「社会の欲するものが、……疑問である。」(16行目)に合致するのでA。

(カ)は、「われわれは生まれると……教養は何も加えるものをもたぬと言うべきであろう。」(7～9行目)に反するのでB。

(キ)は「プラトンはペリクレスについて……語っている」(21～23行目)に反する。アナクサゴラスのもとで非現実的な学問をしたことがあるのは、ペリクレスである。

●メモ●

# 2章

## 【問題】（演習）

出典…安藤宏　『太宰治　弱さを演じるということ』　／　宇都宮大・04年

**文章略解**

現代は情報過多の時代であり、判断主体が隠されて匿名化した客観情報が氾濫している。しかし、情報が客観を装えば装うほど、人々は情報の送り手の背後にある具体的な身振りや手つきといった情報に関する情報、メタメッセージを希求するようになる。太宰治の文体は、作者の意図や本音部分の舞台裏の事情といったメタメッセージが示されるという特徴を持ち、現代的な孤独の状況の中で読者にプライベートな連帯感を抱かせる。そしてそれが今なお太宰の文学が支持されている原因の一つとなっている。

## 解答

**問1**　①＝過多　②＝頻出　③＝折衷（折中）　④＝署名　⑤＝実践

**問2**　記者個人の主観的判断が元であるのに、その判断主体を不明確にして客観を装った新聞記事として危険な表現。〔解答例〕

**問3**　建前の情報が氾濫する現代では、逆に発信者の本音部分の情報が切実に求められるため、あえて欠点や窮状といった舞台裏の事情を提供することで視聴者の関心をつかみ、安堵や連帯感を抱かせて商品の購買へとつなげる。〔解答例〕

**問4**　本来は秘密にしておきたい送り手の舞台裏情報を受け手にも共有させることで、あたかも両者が共同で物語を作っているかのようなプライベートな連帯感を抱いてしまうこと。〔解答例〕

**問5** 客観情報が氾濫する現代、人々は孤独状況の中で送り手の具体情報を希求するが、太宰の文体には作者の意図や事情が具体的に示されるという特徴があり、読む者が作者と共に物語作成に関わっているかのようなプライベートな連帯感を持てるから。〔解答例〕

## 【問題】（自習）

出典…黒井千次『流れと切れ目』／学習院大学・04年

**文章略解**

人が生きていくには時の区切りが必要である。人生には幼少期から老境までおよその区切りがあり、年齢を基準とする制度が外から明確な区切りを与え、年齢の節目の習わしや規範は人の内面からも心構えを切り替えるきっかけを与える。季節や一日の時間の区切りも含め、時間の流れを区切って生きる考え方は正当で妥当に思えるが、その区切り目自体にはかなり曖昧な面がある。唯一截然とした区切りは死の到来であったが、近年の生命科学の進歩は、生死の境界までがあやふやになる不安を生んだ。これは人間が本来切れ目などない時間の流れを勝手に分断してきたことへの時間の復讐かもしれないが、それでも人間はささやかな各自の区切りを抱え懸命に生きていくしかないようだ。

**解答**

問1　1＝輪郭（廓）　2＝厳密　3＝冷凍　4＝襲　5＝継承

問2　ア＝3　イ＝7　ウ＝5　エ＝4　オ＝1

問3　X＝老　Y＝食

問4　制度や習わし〔6文字〕

問5　2

**問6** 最近の科学の進歩は、唯一明確な区切りであった生死の境界までも曖昧にし、時を区切って生きる人の生き方に不安をもたらすから。〔60字・解答例〕

## 解説

**問1** 漢字書き取り問題。**1**「輪郭（輪廓）」は「物の形をあらわしている、まわりの線」の意から転じて「物事のおおよそのところ、概略」の意味を持つ。**2**「厳密」は「細かいところまで配慮する様子」。「厳しく」「精密に」などと「訓読み」や「別熟語」で押さえておくとよい。**3**「冷凍」は部首に注意する。「さんずい」とは異なり「にすい」は「冷凍」以外にも「冬」「凝」「冶」「凄」「冴」のように「固まる」ものにつく。**4**「襲う」には「襲撃」のような「攻撃を加える」という意味以外に、「襲名」のような「地位や名跡を受け継ぐ」意味があるので注意する。**5**「継承」は訓読みで「継（つ）ぎ承（うけたまわ）る」と読める。

**問2** 副詞の空欄補充問題。副詞はほとんどの擬音語・擬態語も含む活用のない自立語で、主として動詞や形容詞などの用言を修飾する。副詞が係る文節までを含む単位で適否を考え、不確かな空欄は無理に決めずに後回しにして平易な空欄から順に決めていけばよい。迷う場合は各選択肢を「類義の別表現や英単語」に置き換えて考えてみると判断しやすいだろう。

**ア**は「長くても［ア］百年前後の個人の生」という言い方から、「どんなに多く見積もったところでそれが限度だ」という意味を表す3「せいぜい」が当てはまる。**イ**は「［イ］深夜に集中して」から「ひたすら、すべて」の意味の7「もっぱら」が、**ウ**には「［ウ］それも怪しくなりつつある」という言い方から、「はっきりしないが、なんとなく」という意味の5「どうやら」が入る。**エ**は係り受けが見極めにくいが、「……時間の復讐である」に係ると見て、「本来、もともと」といった根源を示す4「そもそも」を入れる。**オ**は「［オ］ひと思いに……宇宙の果てまで」から、「考えあぐねた末の飛躍」を示す1「いっそ」が当てはまる。

**問3** 漢字一字の空欄補充問題。「抜き出し」か否かは明示されていないので、本文にない字も含めて考える。**X**は「生涯青春だと信じられたり、若くして［X］成を装う人もいる」という文脈から、「若さ」とは逆の意味で「□成」という熟語を作る「漢字一字」を考えればよいことになる。「老成」以外には見あたらない。**Y**は「こちらが今日のことを語っているのに、ひと眠りした先

方がそれを昨日のこととして話す／ Y い違い」という文脈から、歯がうまくかみ合わない意から生まれた「うまくかみ合わない、齟齬（そご）する」意味を表す「食い違う」の「食」が入る。

**問4**　語句抜き出しの設問。抜き出し問題は、正解部分が意外と離れた場所にあったり、区切り方でも二通りに迷うような場合が多い。したがって「端的に示す」「六字の」「語句」などの条件をヒントとして、関係した記述のある箇所を広く探し、複数を比較検討して決める姿勢が大切である。今回は、「人生の時の区切り」に関して「向こう」からくる「六字」ちょうどの「名詞句」を探していけばよい。人生に区切りを与える事柄については、傍線部の段落から「おおよその区切り（第二段落）」、「制度の明確な区切り（第三段落）」、「長寿の祝いなど習わしによる節目（第四段落）」がそれぞれ事例として挙げられ、次に第五段落で「年齢の異称」の事例を挙げた上で、「制度や習わしによる区分が外側からの強制であるとしたら（第二～第四段落）」、→「他方にはそれを迎える側にとって心構えを切り替えるきっかけが用意されている（第五段落）」と、「外側（＝「向こう」）」と「迎える側」の両面についてまとめている。ここから、六字ちょうどの語句「制度や習わし」を答える。第三段落にある「外からの」は、形式的に合わないし内容的にも「端的」ではない。

**問5**　選択肢による内容判別の問題。まず、段落内で「心構えを切り替える」についての記述を整理すると、「而立、不惑、耳順などとなれば、これは三十、四十、六十歳にふさわしいそれぞれの生き方の規範を示す次第となる」事例を挙げ、それを「年齢の一定の節目で足を止め、我が身を振り返ろうとする考え方」とまとめている。ここから、「年齢の一定の節目で立ち止まって我が身を振り返り、年齢にふさわしい生き方を考えること」といった記述答案の輪郭ができる。これを元に、選択肢を適宜区切って吟味する。1は「より一層盛んに」、3は「若い世代に道を譲る覚悟」という限定した方向性がそれぞれ本文に書いてない。5は「年齢の節目にとらわれない」がむしろ逆方向である。残る2と4との比較になるが、2は「生命活動の消長を自覚」が第二段落に述べてあり、また「自分のありかたを変えていく」も「ふさわしい生き方を考える」に準じていて妥当である。一方4は、後半は妥当だとしても「衰えを自覚して」が、たとえば「而立（＝三十歳の異称）」一つ見ても判るように、「衰え」る方向だけに限定してしまっている点が「消長」と両面を述べる2に比較して劣る。正解は2。

**問6**　理由説明問題。「この事態は、……便宜的発想の弱み」とあるので、まず指示語「この事態」の指す内容を整理する。これは直前の第十一段落第十二段落にある「ただ一つ、ここにだけは截然とした区切りがあると、信じてきた境目」である「生と死の境界までが」「あやふやな事態になりかねない不安に襲われる」という困った事態である。これを踏まえてまとめると、①人間が採用した（「便宜的発想」としての）「人生の時間の区切り」は、生きる上では正当妥当だが「区切り目そのものはかなり曖昧なところ」がある。②しかし（生き方の基本である）「生死の境界」だけは唯一明確に信じられる区切りであった（それが安心をもたらしていた）。③ところが最近の科学の進歩は、この「生死の境界」までも「あやふや」にしかねず、④その結果、時を区切って生きてきた人間の生き方に不安をもたらす、……という論理である。設問は特に「最近になって目立つ理由」を聞いているので、「生死の境界」を曖昧化するものとしての「脳死」や「クローン人間」といった話題を一般化して「科学の進歩」とし、それを主題として理由説明の「……から。」という文末にまとめていく。「最近の科学の進歩」→「基本である生死の境界までも曖昧化」→「時を区切る人間の生き方に不安」の流れでまとめればよい。なお、「便宜的」とは「理想的・完全ではないが、その場の都合で仮に採られたものであるさま」をいうマイナス評価の語。この要素も答案に反映しておきたい。

# 3章

## 【添削課題】

出典…『伊勢物語』 第六十段 ／ いわき明星大学・改

**現代語訳**

昔、ある男がいた。宮廷づとめが忙しく、（そのため）愛情も誠実ではなかった頃の妻が、誠実に愛そうという男につき従って、その男の国へと（逃げて）行ってしまった。この（元の夫であった）男が、宇佐神宮の使いとして（妻と共に逃げた男の国へと）行ったおりに、（妻は）ある国の（接待係の役人である）祇承の妻になっていると聞いて、（接待係の役人である今の夫に）「当家の女主人に杯を捧げ持たせよ〔＝お酌をさせよ〕。そうでないなら（この酒は）飲まないつもりだ」と言ったので、（元の妻が）杯を捧げ持って差し出したところ、（男は）酒の肴（さかな）であった橘（の実）を手に取って、

皐月待つ……（夏の五月を待って咲く橘の花の香をかぐと、昔慣れ親しんだ人のたきしめた袖の香が、なつかしく香ってくることだ）と詠んだのを聞いて（女は、この人は自分が捨てた昔の夫だと）思い出し、（不倫のわが身を恥じて）尼になって山に籠って暮らしたのだった。

**解答**

問1　1＝たちばな　　2＝さつき、五月、夏　　3＝か

問2　連体形

問3　まめに思はむといふ人〔10字〕

問4　女主人に杯を持たせないなら、私はこの酒を飲まないつもりだ。

〔別解＝女主人に酌をさせないなら、私はこの酒を飲まないつもりだ。〕

**問5** 歌でこの男が捨てた夫だと知り、逃避行した我が身を恥じたから。〔30字・解答例〕

**問6** 一箇所目＝まめに思はむ　二箇所目＝ある国の祇承の官人の妻にてなむある

**問7** 歌物語　(ウ)・(オ)

**特別問題**

誠実に愛そうという男につき従って、その男の国へと行ってしまった。

## 【問題】（自習）

出典…『十訓抄』　第六の三十六　／　東京水産大学・改

### 現代語訳

横川の恵心僧都の妹である、安養の尼上のところに、強盗が入って、ありったけの家財道具を、すべて取って出ていってしまったので、尼上は、紙衾（紙で作った粗末な夜具）というものだけを引き被っていらっしゃったところ、姉である（安養の）尼のところに、小尼上という人がおりまして、（その小尼上が安養の尼上のところへ）かけつけて参ってみると、小袖が一つ落としてあったのだが、それを、（拾って、安養の尼上に）「これ（小袖）が落としてありました。お召しなさい。」と言って、持ってきたところ、（安養の尼上は）「（強盗は）それを奪い取った後は、きっと自分の物と思っていることでしょう。持主が納得しないものを、どうして着ることができるでしょうか（、着ることはできません）。（強盗は）まだ遠くまではまさか行っていますまい。急いで持っていらして、（強盗どもにこの小袖を）やってきてください。」とおっしゃったので、（妹の小尼上は）門口の方へ走り出して行って、「おーい、おーい。」と（強盗を）呼び戻して、「これを落とされました。確かにお返し申しましょう。」と言ったので、強盗たちは立ち止まって、しばらくの間考えている様子であったが、「まずい所に来てしまったことだ。」と言って、奪い取った品物を、そっくりそのまま返し置いて、帰ってしまったということだ。

### 解答

問1　(1)　①＝そうず　②＝けしき　(2)　②＝様子〔類答可〕　③＝すっかり〔類答可〕

問2　(a)＝(ア)　(b)＝(イ)　(c)＝(ア)

問3　A＝(エ)→(イ)　B＝(イ)→(エ)　C＝(エ)→(ウ)　D＝(エ)→(ウ)　E＝(ウ)

## 解説

**問1**　基本的な知識問題。意味は、知らなかったとしてもある程度は周囲の意味のつながりから推測ができるものだが、読み方は、知らなければどうにもならないので、日頃の学習の時から、意識的に覚えるようにしてほしい。効果的な方法として、時間のある時に、何回か声を出して文章を読む習慣をつけることを勧める。

①「僧都」……これは「そうず」と読む。意味は注を参照のこと。僧侶の位階として他に多いのが、「僧正（そうじょう）」「権僧正（ごんのそうじょう）」などである。

②「気色」……この語は「けしき」と読み、「有り様。態度。顔つき。意向」など、多く直接視覚で捉えた自然界や人物などの様子、表情についてを表す。ここでは、「盗人ども」が「案じたる（＝考えている・思案している）気色」という使われ方をしているので、「様子、有り様」といった現代語が当てはまるであろう。なお、この気色という語は、「気色あり、気色覚ゆ、気色立つ、気色付く、……」など、さまざまな派生語や連語があるので、一度辞書を引いて、まとめて覚えるとよい。また、意味の上からは、気色が「視覚で捉えた」ものを表すのに対して、それ以外の、つまり「聴覚、嗅覚、触覚、感覚等」で感じとった自然界や人物などの雰囲気や様子について表す言葉に「気配（読みは『ケワイ』）」があるので、これもついでに覚えよう。

③「さながら」……漢字で書くと「然ながら」となる。「さ」は指示語で、口語の「そう」、「ながら」は同時性などを表し、口語の「まま」に当たる。つまり、この言葉は「そのまま、全部」という意味である。これが打消と一緒に使われると、「全然、全く」になる。

**問2**　このように、意味を選択肢で聞いている問題の場合は、傍線部をいちいち全部訳さなくとも、選択肢の方をざっと見て、違いのある部分に焦点を絞って訳を考えれば、時間的にはやく解答できるであろう。（ただし、今の段階では入試までの時間もあることなので、復習の際には選択肢がないつもりで、自分なりの訳を考えてもらいたい。）

(a)　選択肢を見ると、「思ひつらめ」の部分がポイントになっていると分かるだろう。「思ひ」は「思ふ」の連用形、「つ」は実現（完了）、確述の意を表す助動詞で、「らめ」は現在推量を表す助動詞「らむ」の已然形である。よってこの部分は、「今ごろは、とうに思ってしまっているだろう」という意味であるととれる。（ここが終止形の「らむ」ではなく、已然形で終わっているのは、「こそ」の結びになっているからなのであるが……、念の為。）

(b) ここでポイントになるのは「いかが……べき」の部分である。「べき」は助動詞「べし」の連体形である。（この「べし」が終止形でないのは、「いかが」という言葉による。「いかが」は「いかにか」から変化した「いかんが」の「ん」を表記しない形と考えられている。つまりもとの「いかにか」を考えた場合、結びは当然連体形になる。）「いかが」という言葉は、疑問を表したり、反語を表したりするが、どちらにしても言ってみれば、結論が言外に表現されているのである。この場合は、「どうして着ることができようか（いやできない）」という反語になっている。もし仮に「着るはいかが」という文であった場合、「着ることはどうであろうか。」と形の上では疑問になるが、その表す意味は、反語と言ってもよいものである。つまりこの語に関しては、さほど神経質になる必要はないのである。

(c) この部分を文節で分けると、「あしく」と「参りにけり」に分かれる。「あしく」は形容詞「あし」の連体形で、意味としては「悪い・まずい・不都合だ・卑しい……」等、現在の「悪い」とほぼ同じ意味と考えてよかろう。「参りにけり」は、ここでは来るという意味の謙譲語の「参る」に完了の助動詞「ぬ」の連用形（＝「に」）と、過去回想の助動詞で、ここでは詠嘆を表す「けり」が付いたもので、全体の意味としては「来てしまったよ。」となる。この二つを単純に結び併せると「悪く（不都合に）来てしまったよ。」となるが、これでは意味がよくわからない。そこで、何かが省略されていないかと考えてみる。「あし」の後に来る語としては、名詞が想定される。「参りにけり」の前といえば、「どこに」にあたる語が入ると考えられよう。この二つの条件を満たす語といえば、例えば「所」なんかはどうだろうか。「（都合の）悪い所に来てしまったよ。」これならばすんなり意味が通る。

**問3**

**A** まず「これ」が何であるかを押さえる。会話文のすぐ前の文に「小袖を一つ落としたり……」とあるので、「これ」は小袖だとわかる。そうすると、「奉れ」は「小袖を奉れ」である。「奉る」にはいくつかの意味があるが、「小袖を」とくれば「お召しになる、身におつけになる」の意味になろう。これがわかれば、「誰が誰に」は簡単。今の段階で小袖を着る必要があるのは、「紙衾といふ物ばかりをひき着てをられたりける」尼上であり、その尼上に小袖を差し出したのは、小尼上である。

**B** 問題の小袖を持って行ったところ「それを取りて後は……」とあるので、ここの「それ」も小袖を指していることがわかろう。それを「取りて」と言っているのであるから、この言葉は当然、尼上のものである。では誰に言ったのかであるが、これを考えるために、もう少し会話文を検討してみよう。「……いまだ遠くはよも行かじ。」とは、まだそんなに遠くにはまさか行っていな

いだろう、という意味である。では、誰が遠くに行っていないのか。この状況から考えれば、尼上と小尼上は話していて、「恵心僧都」はこの話には、直接でてきていない。とすると、この行ってしまうのは「強盗」としか考えられない。つまり、この「行く」はもっと言ってしまえば、「逃げていく」なのである。「逃げないうちに早く行って、この小袖を返してらっしゃい」と言っている人物は、先のAで「小袖」を受け取った相手、すなわち「安養の尼上」しかいないことになる。それでは、誰に返してこいと言っているのかといえば、小袖を持ってきた、「小尼上」にである。

C　「やや」というのは感動詞で、呼びかけるときに発する言葉である。意味としては「これこれ。ちょっと。もしもし。」などが当てはまる。「と呼び返して」とあるので、話の流れを踏まえて考えれば、姉に言われた小尼上が、強盗を呼び止める言葉と簡単にわかろう。

D　「と呼び返して……といひければ、」とあるので、ここの二文は同じ主語だと考えられる。つまり同一人物の台詞であるということだ。「これを落とされにけり。」と言っているのだから、言われた相手が小袖を落とした主である。従って、ここは、小尼上が強盗に言った会話文である。

E　前後を見ると、「盗人ども……て、……て、『E』とて、……」と単純接続の助詞「て」でつながっているので、Eの言葉を発した人物は、「盗人ども」であると判断できる。

L1J
高１東大国語

Z-KAI

| 会員番号 | |
|---|---|

| 氏　名 | |
|---|---|

不許複製